会員の広場

古事記にみる風三態

原見敬二*

古事記は，わが国最古の歴史書であり，文学書でもある．このうち，風に関する記録について述べる．ただし，風の神である志那都比古神（シナツヒコノカミ）や，稲羽の素兎（シロウサギ）の神話で「海塩を浴みて，風に当り伏せれ」などは除く．なお，西暦年については日本書紀によった．

1は，わが国で始めての短期予報の歌，2は風浪に関するもので，3は日本海低気圧とみられる現象である．

1. BC 581年，初代神武天皇が崩御されたあと，其の庶兄（ママセ）當芸志美美命（タギシミミノミコト）が王位継承に関して，その弟3柱を暗殺しようと謀っているとき，その母后である伊須気余里比売（イスキヨリヒメ）が次に示す2首の歌で実子の3兄弟に危急を知らせ難を逃がれられた．なお，末弟が當芸志美美命を殺し，第2代綏請天皇となられた．

狭井川（サヰカハ）よ　雲立ちわたり　畝火山（ウヌビヤマ）　木の葉騒（サヤ）ぎぬ　風吹かむとす

畝火山　晝は雲と居　夕されば　風吹かむとぞ　木の葉さやげる

この状況は，狭井川（奈良県三輪山から発して巻向川に入る）より対流性の雲が湧き立って畝傍山にかかっている．その雲の周囲では独特の空気が循環していて，木の葉が無気味にざわめいている．そして夕方になると樹梢波が生じる程の突風と俄雨が予想される．突風とは暗殺を意味しており，短期予報の表現方法を歌に託されたのである．

2. 111年，第12代景行天皇の皇子，倭建命（ヤマトタケルノミコト）が東征のため相武国焼遣（サガムノクニヤキヅ：現在の静岡県焼津）を出港して走水海（ハシリミヅノウミ：現在の浦賀水道）を渡られるとき，暴浪（アラナミ）のため航行不能となり転覆の恐れもでてきた．その后弟橘比売命（オトタチバナヒメノミコト）は夫君の身代わりとなり，海中に入られ浪は静まった．后の櫛は7日後に海辺に漂着し，袖ケ浦付近には衣が漂着した．千葉県木更津市の吾妻神社は，その衣を納めて建立されたという．これは倭建命の旅程からみて，冬期の寒冷前線に伴う突風であろうかと思われる．

3. 200年10月3日の初冬（陰暦），神功皇后が対馬北部の和珥津（ワニツ：現在の鰐浦）から軍船を出港させ，朝鮮海峡を渡っての新羅親征の件に「爾に順風大（オヒカゼサカリ）に起きて，御船浪の従（マニマ）にゆきつ」とある．追風とは南偏した強風であろうから，おそらく発達中の低気圧が朝鮮半島を東進していたのだろう．また，日本書紀編纂の史料に「……則大風順吹．帆船随レ波．……」ともある．日本の軍船の大きさは，福岡県久留目市の高良（コウラ）大社の『高良玉垂宮縁起』(14世紀前半完）によれば，47艘375人とあり，8人乗り程度の帆船であろう．なお，高良玉垂命と景行天皇とは一つ神格の神と考えられている．昔も今も敵前上陸成功には，風の要素が重大であることに変わりはない．

以上の伝承記事に対し，1の神武天皇は実在しないらしい．3の神功皇后は，364～404年，大和朝廷の数次にわたる朝鮮出兵を伝説化したものとの説もある．しかも，ここに記述した年代についても，1は神武天皇即位のBC 660年より数え，2は倭建命が出征にあたり伊勢神宮に参拝された年より求めてあり，疑問を生じることになる．しかし古事記・日本書紀などに記録されている事柄は史実から生まれたものとしなければ，この報文はある程度成立しないことになる．

* Keiji Harami, 神戸　長田神社.